

# 形象埴輪の配置と復原される葬送儀礼（上）

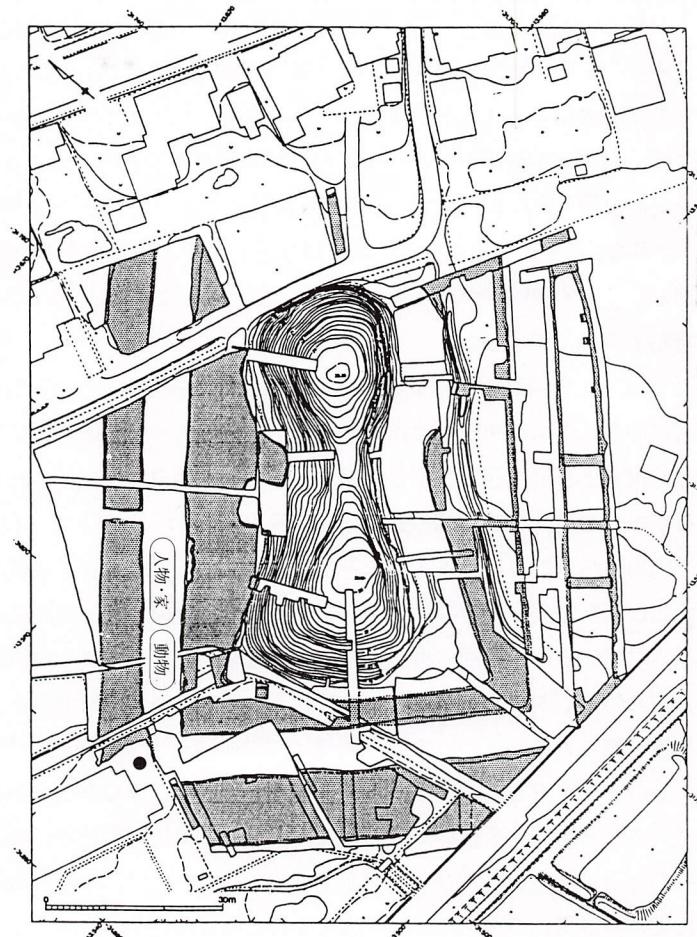
—埼玉瓦塚古墳の場合を中心に—

若松 良一・日高 慎\*

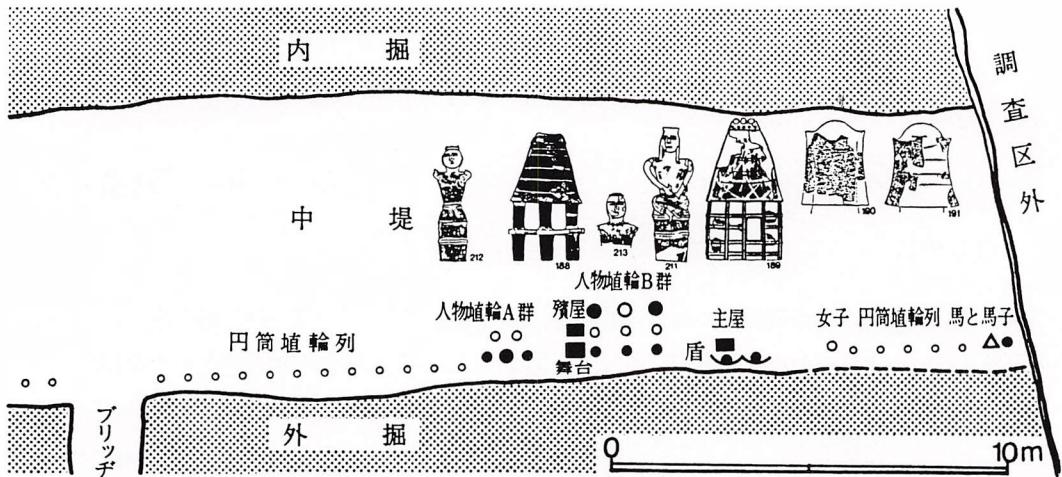
## 1 はじめに

埼玉県行田市にある国指定史跡埼玉古墳群は、巨大円墳1基と8基の前方後円墳を中心とする関東地方最大級の古墳群である。その中にあって、瓦塚古墳は墳丘の現存主軸長67mと小規模な前方後円墳である。しかし、昭和54年度以来4次にわたる範囲確認調査と昭和63年度以来4年間に及ぶ保存修理工事に伴う発掘調査によって墳丘の形態はもちろん、内堀、中堤、外堀などの外部施設が十分に解明された古墳として学術的には特別な意味をもっている。特に昭和57年度には、前方部西側の外堀内より、中堤から転落した状態で多数の形象埴輪が出土しており、形象埴輪研究の上で絶好の資料となっている。その成果については、既に『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』として埼玉県教育委員会より昭和61年3月に刊行されているところであるが、平成2年度にはその南側の隣接地が発掘調査され、さらに馬や水鳥、犬などの動物埴輪と人物埴輪の新資料が出土し、今春、『埼玉古墳群発掘調査報告書第8集二子山古墳・瓦塚古墳』として刊行される。

このように、瓦塚古墳の形象埴輪群は、ようやく、その全貌が知られこととなったわけであるが、形象埴輪の組成が豊かで、あらゆる要素を含んでいることと、原位置の推定が可能であることから、総体として、これらが何を意味するのかという根本的命題を解明する上で、極めて良好な資料であるということができる。本稿では、このことを



第1図 瓦塚古墳の形象埴輪配置(1/1,000 黒丸は盾持人埴輪出土推定位置)



第2図 形象埴輪群配置復原図（人物の中黒ドット：男子、白抜：女子）

究極の目的としているが、目的達成のためには、まず、基礎作業として、構成要素の単位となる一個一個の個体を可能な限り復原し、その原位置の推定作業を行う必要がある。しかし、言うは易く、行うは難しの言のごとく、実際には完形品が形をとどめた状態で出土する場合は稀で、多くの個体は、崩壊して広い範囲に散乱し、他の個体と重なりあって出土しており、胎土や色調の近似するものもあり、遺存する部分が全体のごく一部であったりして決して復原作業は容易ではない。

今回、過去の整理済資料を含めての資料の見直しを行うこととなったきっかけは、平成2年度出土資料の復原作業にあたって、昭和54年度調査区出土資料との接合関係が考えられたからである。また、平成5年度には瓦塚古墳の調査成果をテーマとした特別展の開催計画があり、その主要展示候補として形象埴輪群があげられている。我々は、このことを一つの機会として捉え、瓦塚古墳出土資料の整備に着手した。

ところで、今回資料紹介する盾持人埴輪は「さきたま」第3号に掲載したように、昭和32年、瓦塚古墳西側の畠地を水田に改作中、偶然出土したものを、所有者である川崎栄一氏が当館に寄託し、復原修復の上、展示資料として活用してほしいとの申し出を受けたものである。発掘調査中にみられなかった盾持人埴輪が構成要素として新たに加わったことと、出土位置が第1図に示すように中堤の隅角部付近の外堀内であることが確かであることから、この資料の学術的価値は極めて高い。

同時に資料を提示するのは、昭和57年度出土資料のうち、実測図の掲載のないものと、実測図が掲載されているが、今回の再検討によって復原が大きく進展した資料である。新たに武人などの全身立像の特徴が明らかとなったことは、人物埴輪の編年的研究の上でも有意義であった。瓦塚古墳の形象埴輪群の意味については『第4集』において、配置復原図（第2図参照）を掲げて、殯を再現したものとの見方を示し、特に吹放ちの建物と弾琴、踊る群像との関係から「たまふり」の場面が示されている可能性を説いた。これには、橋本博文氏や辰巳和弘氏からの批判もあり、再論を期していたところである。現在、復原途上の資料もあるので、次号において残りの資料の掲示を行ったうえで、葬送儀礼の復原について論じることとしたい。

(若松 良一)

## 2 形象埴輪の個別的観察

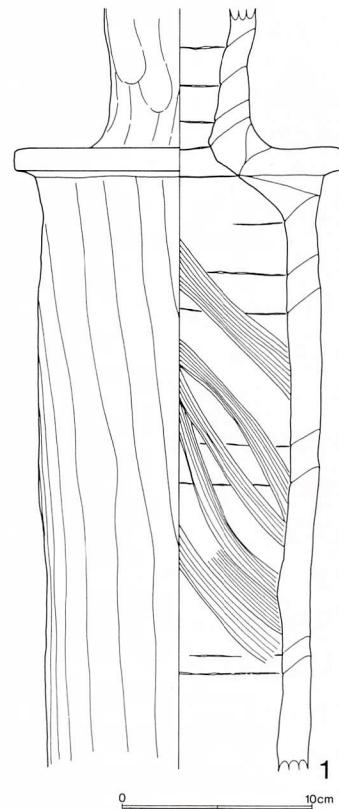
### 1. 器財埴輪（第3図）

この資料は『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』（以下『第4集』）の206、207に相当し、残存高40cm、上端から8cmのところには一辺17cmの方形の鈸状突出部が付く。鈸状突出部を境に上部は径8cm、下部は15cmの円筒部になっており、厚さは1.5cmである。浅黄橙色（10YR8 / 3）を呈し、石英、チャート、角閃石、白色パミスを少量含み、全体として精緻な胎土である。焼成は良好であり、外面はタテハケ（1.5cm/10本）及びナデを施し、内面は斜位のナデの後、斜位のハケ（2.5cm/10本）を一部に施す。円筒部は粘土紐を積み上げて成形しており、内面にはその接合痕が残っている。鈸状突出部は、粘土板を円筒部に貼り付け、接合部の隙間に粘土を充填している。同様な破片の存在から、当初はさらに二・三個体樹立されていたようである。

この資料は、上部及び下部構造が不明である。一応器財埴輪と報告したが、具体的には大刀形埴輪が考えられる。それは、把口部に三輪玉を配した破片などが存在するからである。しかし、直接に接合はせず、類例も確認できないので、今回は可能性にとどめておきたい。

### 2. 人物埴輪・女子（第4図）

『第4集』の240の腕部がこの資料に接合している。島田鬚の一部、額から右頬、首から胸、右腰が残存し、その他は復原である。浅黄橙色（10YR8 / 3）を呈し、石英、チャート、角閃石、酸化鉄粒を少量含み、全体として精緻な胎土である。焼成は普通であり、肩及び首の一部と腕はハケ（2.3cm/10本）を施し、その他はナデを施す。島田鬚は粘土板で、眉は粘土を貼り付けて表現している。目はほぼ水平に細く開けられている。首には円形浮文を配した粘土紐によって首飾りを表現している。腕は棒に粘土を肉付けし成形しており、四指は粘土紐によって別々に製作している。両腕ともに前方に突き出す姿態であるが、右手はほぼ水平に、左手はやや下方に向いている。右手の指の曲り方からすると、壺などの器をささげるものではなく、上部をやや前方に向けた棒状のものを持っていたようである。あるいは、四ツ竹などの鳴り物を持っていたのかもしれない。



第3図 瓦塚古墳出土器財埴輪

### 3. 人物埴輪・男子（第4図）

『第4集』の219に相当する。残存高は31cmである。『第4集』では右手を上げる踊る男子と報告したものであるが、今回の接合結果により両腕を腰部付近まで下げる姿態であることが判明したので訂正しておきたい。赤色（7.5R4 / 8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミスの粗砂を多く含む。焼成は極めて良好であるが、やや表面はもろい。頭髪は頭頂溝があることから振り分け髪であり、後頭部から背中にかけては垂髪を粘土板を貼り付けて表現している。粘土貼り付けの様子から、垂髪は後頭部の髪だけで形作られていたことが分かる。耳は残存していないが、右耳下部に粘土塊が貼り付いており、耳飾りもしくは美豆良の表現と思われる。顎部は粘土板を貼り付けて製作しており、ヘラ工具でほぼ水平に細い目と口が開けられている。腕は中実であり、拇指のみ別に製作している。外面は胴部と垂髪、首の一部がタテハケ（2.2cm/10本）、その他はナデである。内面は胴部がヨコハケ（2.2cm/10本）、首から上はナデである。

この資料は腰から上ののみであるが、胎土、色調、焼成などがほとんど同じであり、同一個体と考えられる大刀を佩する腰部、裸足の台部も存在する。さらに、極端に締まった腰などから全身像となる可能性もある。

### 4. 人物埴輪・全身像台部（第5図）

残存高13cm、台部復原径23cmを測る。赤色（7.5R4 / 8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミス、火山ガラスを多く含む。焼成は極めて良好である。外面は全体にナデを施しているが、台部の三角形凸帯の剥離面には一次調整のタテハケ（3.2cm/10本）が確認できる。内面はナデである。円形の台部のドーム天井に粘土塊を貼り付け、やや内股の足を製作しているが、注目すべきことはその先端にヘラ工具で線刻を入れている点である。この線刻によって五指を表現したと考えられる。足首より上は残存していないが、履物および衣服の表現が見られないことから、裸足の全身像の台部と考えられる。

### 5. 人物埴輪・全身像台部（第5図）

残存高14cm、台部復原径23cmを測る。橙色（5YR7 / 6）を呈し、石英、チャート、長石、白色パミス、酸化鉄粒の小礫を多く含む。焼成は良好である。外面はタテハケ（1.8～2.2cm/10本）を施し、内面は斜位のナデである。凸帯は均整のとれた台形を呈する。円形の台部のドーム天井に粘土塊を貼り付け、やや内股の足を製作している。4と同様、足の先端にはヘラ工具で線刻を入れて五指を表現しているが、かなり扁平な足になっている。左足の剥離面には、台部のタテハケが確認できる。この台部と6の武人埴輪は胎土、色調、焼成などがかなり共通しており、同一個体である可能性もある。

### 6. 人物埴輪・武人（第5図）

『第4集』の199に相当し、腰部から草摺部、右脚部が残存する。外面は橙色（5YR7 / 6）、内面は赤色（10R5 / 8）を呈し、石英、チャート、長石、角閃石、白色パミス、火山ガラスの粗砂を多く含む。焼成は良好である。左腰部には大刀を佩いており、断面長方形の鞘部と把口部の一部が残存する。草摺は三枚の粘土板を重ねることによって表現しており、忠実なつくりである。脚部は粘土紐を輪積みして製作しており、膝下で足結を結び、結び紐が下がっている。脚部および草摺部、

大刀はナデを施し、その他はタテハケ（1.8cm/10本）である。内面は縦位及び斜位のナデを施す。

この他同一個体と思われるものに、冑の鍔部や腰帶、革甲と考えられる破片も存在する。腕などの破片は確認できないが、抜刀スタイルの武人となる可能性が高い。

## 7. 人物埴輪・武人（第6図）

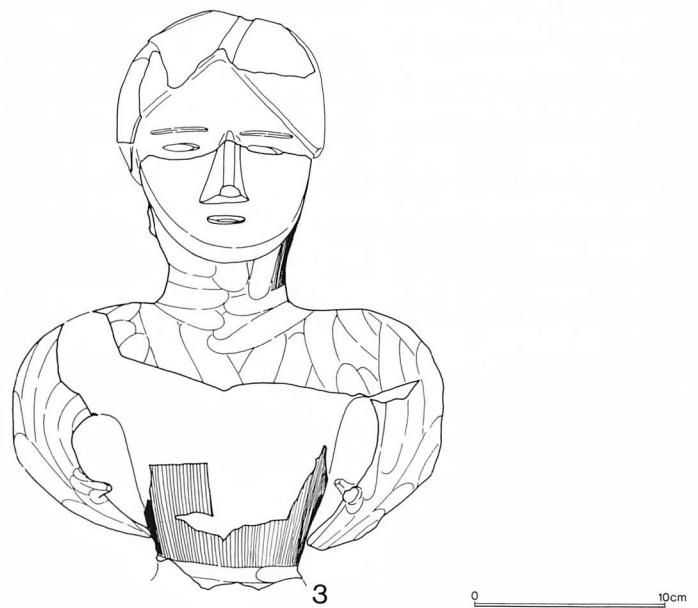
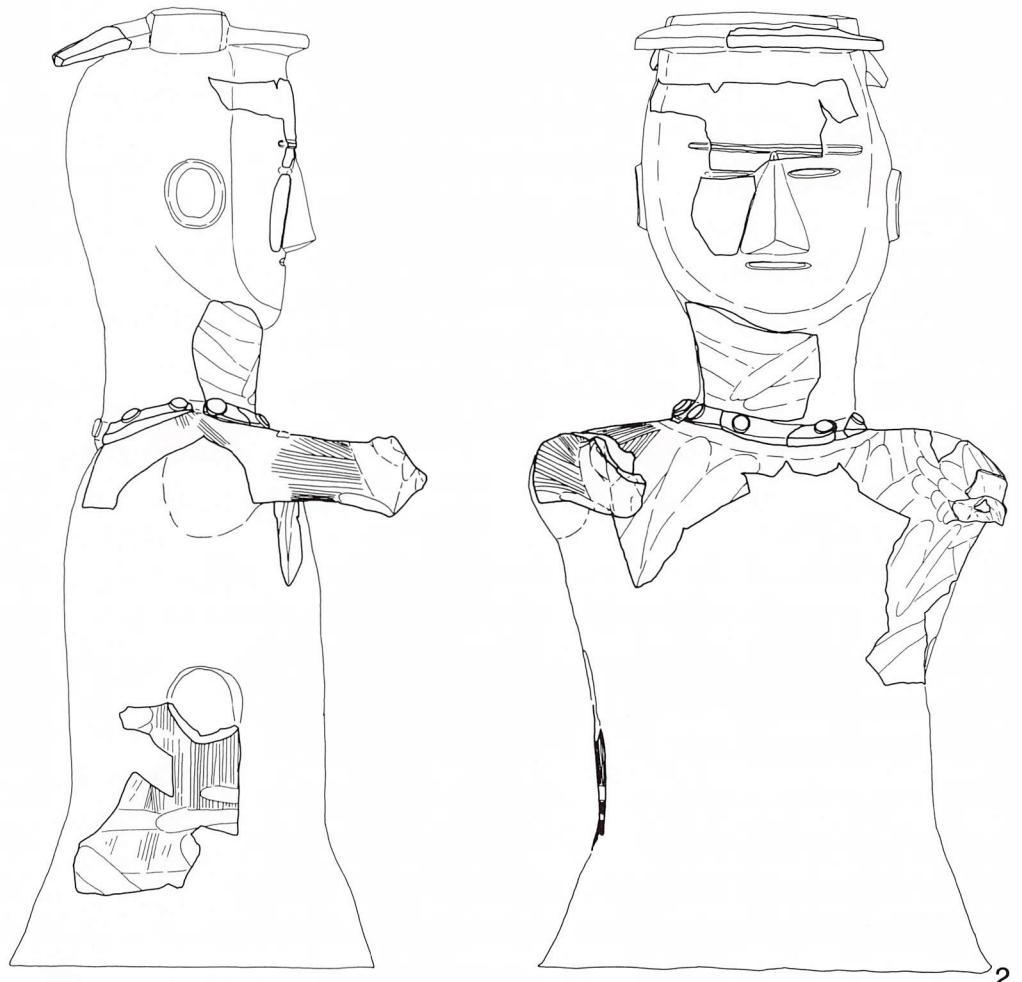
台部下半、上半身を欠損するが、現状での高さ60cmを測る。浅黄橙色（10YR8 / 3）を呈し、石英、チャート、角閃石、酸化鉄粒を含む。焼成はやや軟質である。6と同様に粘土板を重ねることによって草摺を表現しているが、6より薄い粘土板を四段に重ねる点で異なっている。下から二段目はヨコハケ（2.5cm/10本）、その他はナデを施している。胴部はタテハケ（2.3cm/10本）の後、横方面に沈線を巡らし、縦及び横方面に朱線を施すことによって、挂甲の小札を表現している。腰部には、腰帶として幅4cmの粘土板を貼り付けている。脚部は粘土紐を輪積みして製作しており、外面タテハケ（2.3cm/10本）、内面はナデを施し、足結などの表現はない。円筒形の台部のドーム天井に粘土板を貼り付けてやや内股の足を表現しているが、先端が欠損しているため履物の有無は不明である。また、草摺の上部が左右ともに欠損しているため、大刀などを佩していたかどうかは不明である。

## 8. 人物埴輪・盾持人（第7図）

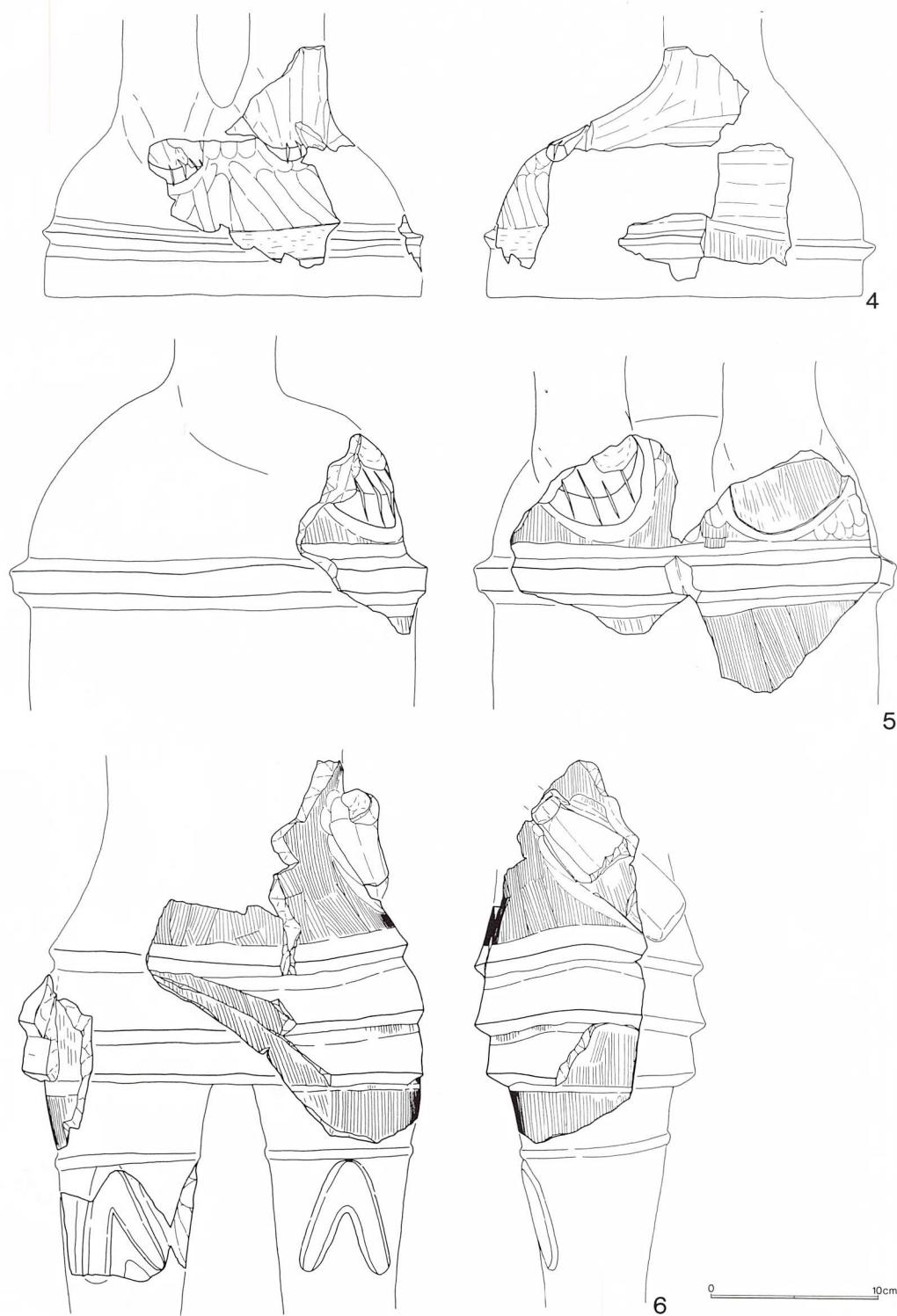
円筒部の最下段を欠損するが、復原高84.6cm、円筒部径18.6cm、盾部長36.5cm、幅27.8cmを測る。橙色（5YR7 / 6）を呈し、石英、チャート、長石、火山ガラス、酸化鉄粒の小礫を多く含み、全体として胎土はやや粗い。焼成は良好である。円筒部には、六条の断面がややつぶれたM字形の凸帯を貼り付ける。五条目からは内傾し、首部の最上凸帯に至る。三段目と六段目の側面には、円形の透孔を二個づつ穿っている。円筒部及び首部、後頭部下半はタテハケ（2.2cm/10本）、盾部は緑辺部がナデ、その他はヨコ・タテハケ（2.2cm/10本）を施しているが、鋸歯文などの文様はない。盾部は、円筒部に縦長の粘土板を貼り付けて製作している。顎部は粘土板を、鼻は粘土塊を貼り付けて製作しており、ヘラ工具で目はやや下がりぎみに、口は水平に細く開けられている。眉は粘土を貼り付けて表現している。耳は円孔を穿ち、その下には耳環の剝がれた痕跡が確認できる。頭頂部には、所謂笄帽を付けているが、その装着方法は、粘土紐を輪積みして頭部を製作した後、頭頂部を塞がずに別作りの笄を置き、隙間に粘土を充填する。そして、接合部は丁寧にナデを施している。

この盾持人は、瓦塚古墳から出土している他の人物埴輪に比べ、顔のつくりや全体の大きさがかなり大柄である。盾持人のもつ辟邪という性格が、大きさに表されているといえよう。

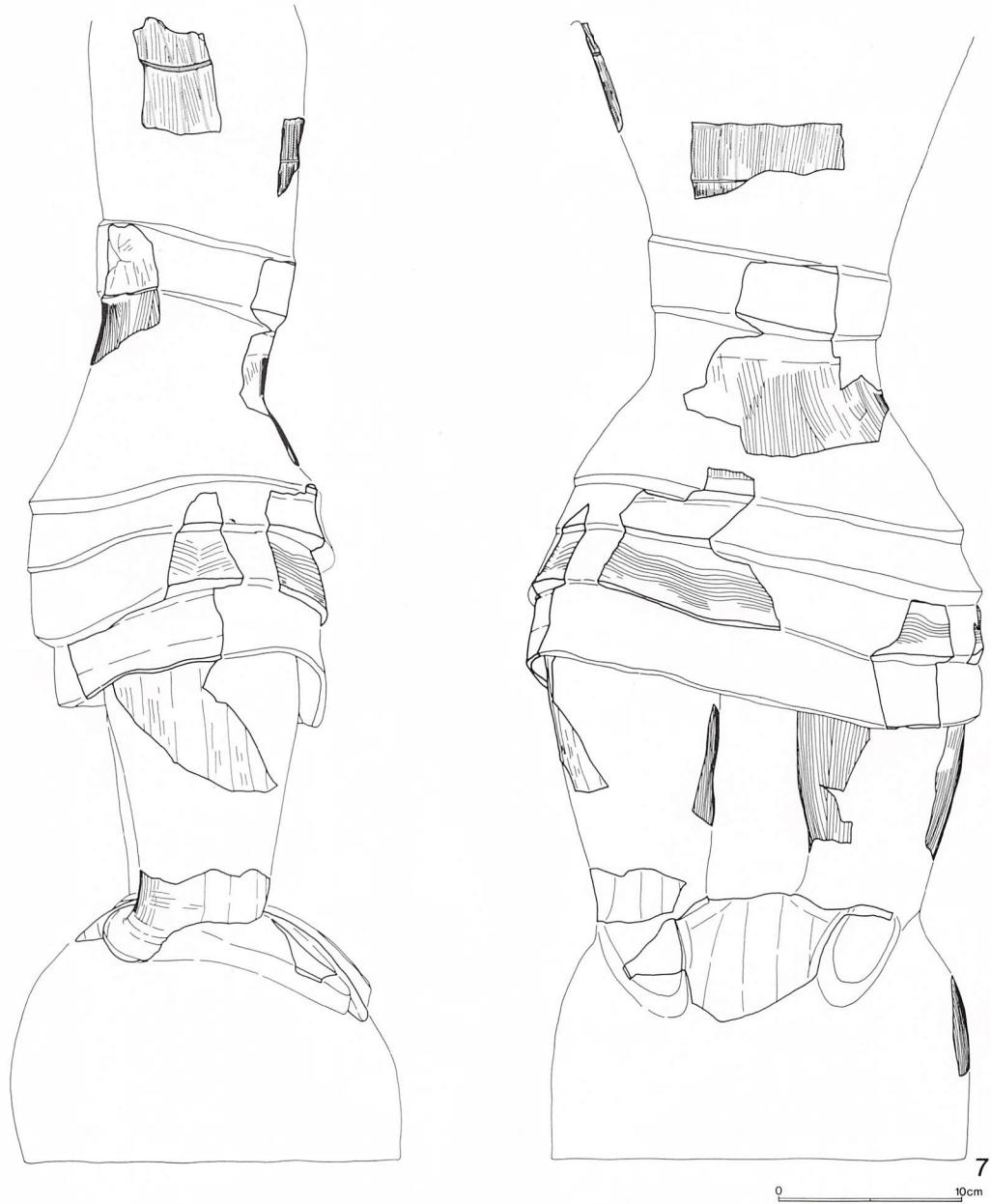
（日高 慎）



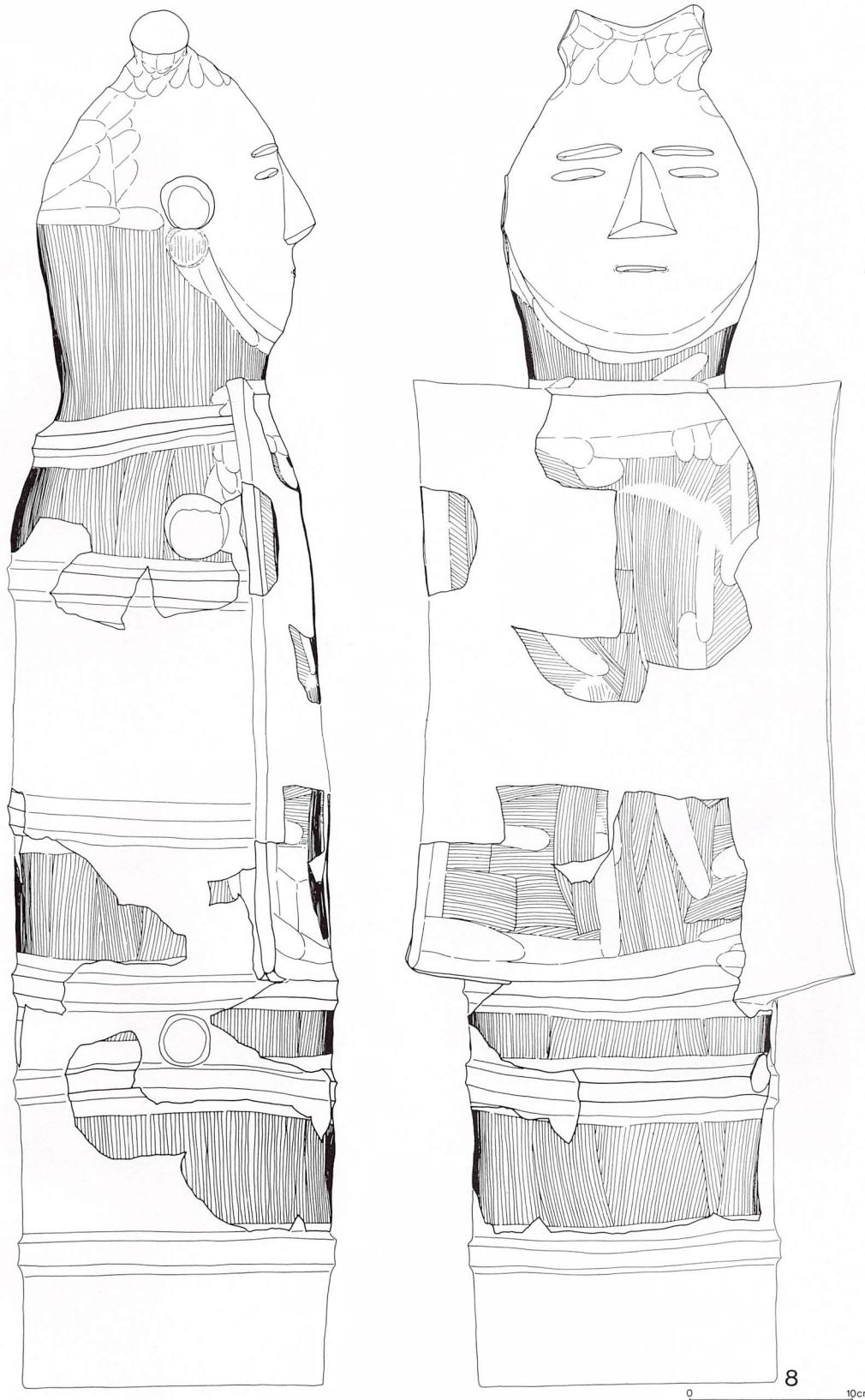
第4図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



第5図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)



第6図 瓦塚古墳出土人物埴輪（1/4）



第7図 瓦塚古墳出土人物埴輪 (1/4)

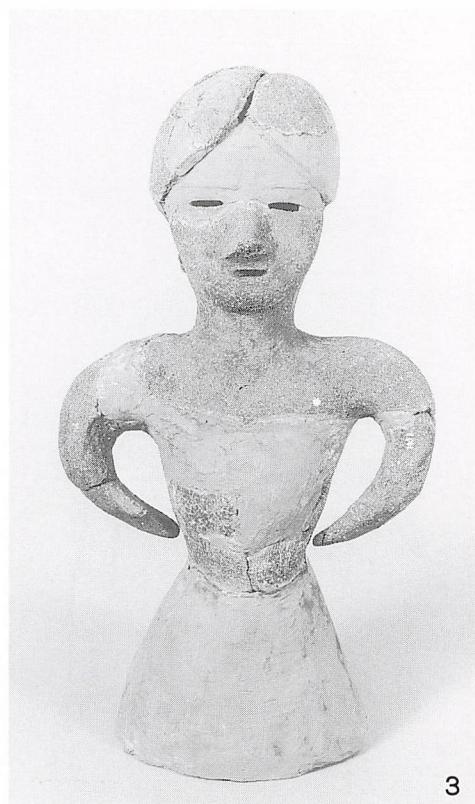


写真1

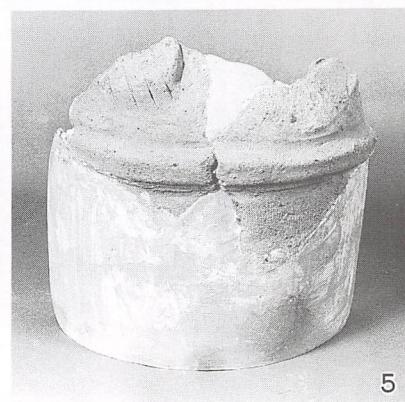
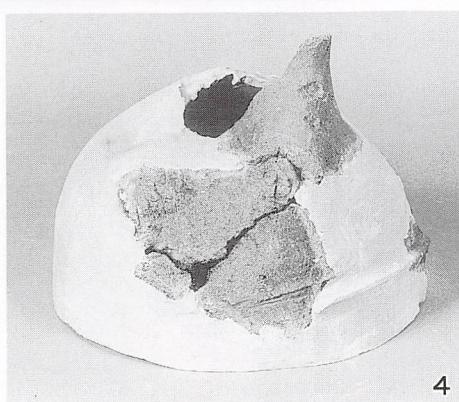
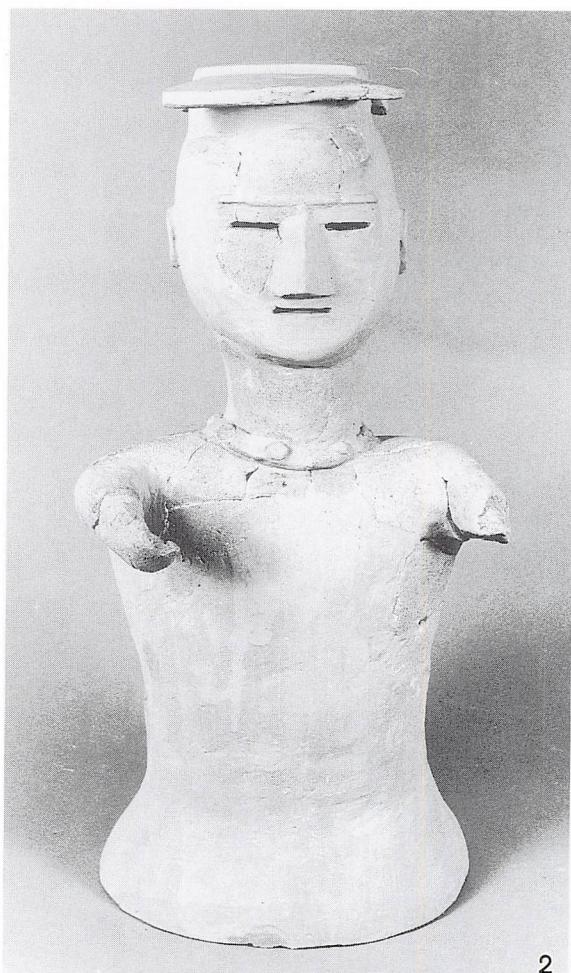
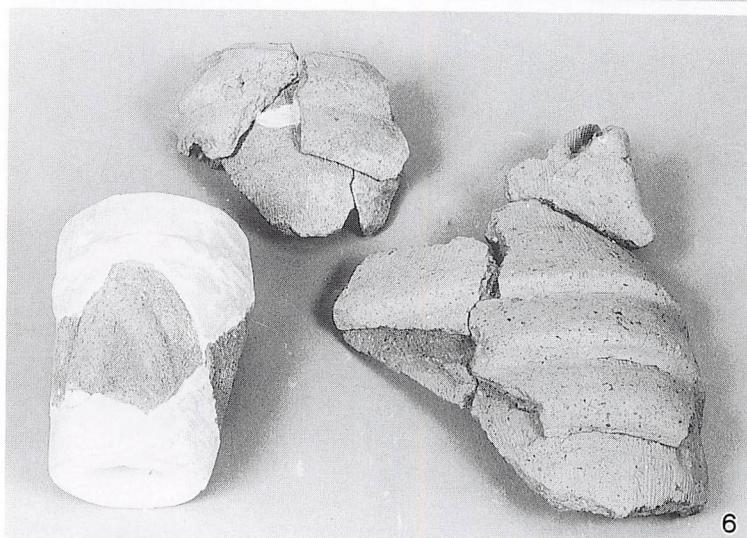


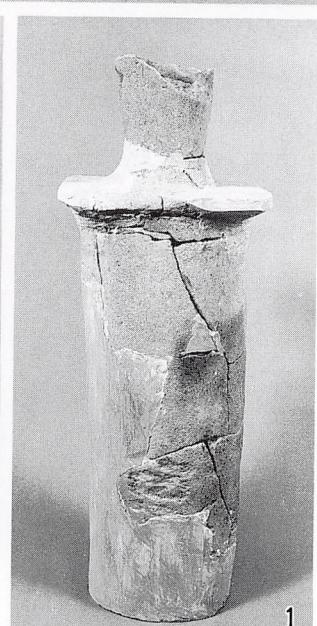
写真2



2



6



1

写真3

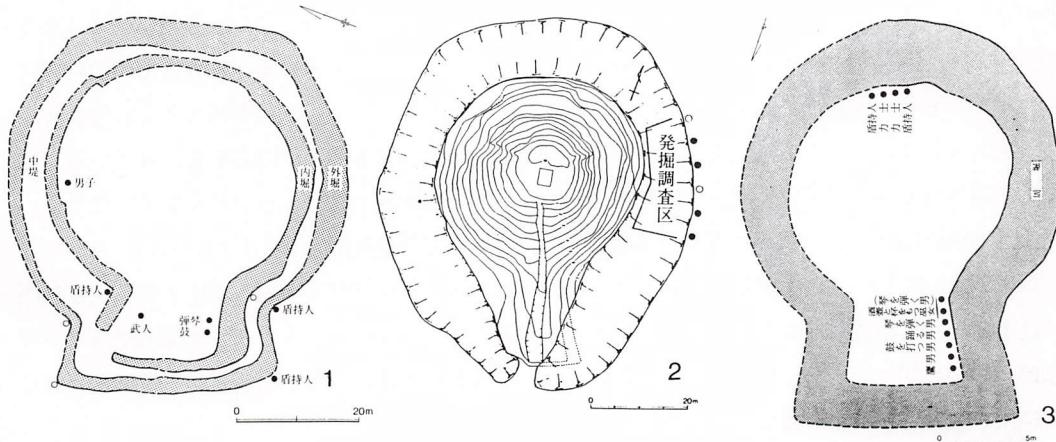
### 3 盾持人埴輪の検討

瓦塚古墳出土の盾持人埴輪は、同古墳出土の他の人物埴輪より格段に大きく製作されている点や、頭頂部に2個の突起をもつことに形態的な特徴がある。また、出土位置からみて、中堤の隅角部に単体で配置された可能性が高く、他の人物埴輪群とは異なった用いられ方がなされているようである。いくつかの事例をあげて、盾持人埴輪の配置の特性と分布や編年的位置づけについて検討してみたい。なお編年については若松の人物埴輪編年案（参考文献3）を用いる。

#### 盾持人埴輪の配置のあり方

瓦塚古墳のような前方後円墳での実例は多くないが、いくつかの帆立貝式古墳で盾持人埴輪の配置が明らかにされているので紹介してみたい。埼玉県熊谷市の女塚1号墳は二重の周堀をもつ帆立貝式古墳であるが、盾持人埴輪はくびれ部に対応して内堀と外堀が屈曲する位置及び外堀の前方部隅角の外側に配置されていた。一方、彈琴や武人などの人物埴輪群は前方部の墳丘上に集中して配置されていた。埼玉県東松山市のおくま山古墳は馬蹄形の周堀をもつ帆立貝式古墳であるが、盾持人埴輪は周堀外の外堤上に4個体以上が配置されていたとみられる。福島県泉崎村の原山1号墳の場合は、丘陵の突端に築造された帆立貝式古墳だが、墓道を登りつめて墳丘が初めて目に入る正面（後円部）に盾持人と力士の埴輪が立てられていた。巫女や楽人などの人物埴輪群が集中的に配置されたのは前方部であり、両者は大きく離れている。

このような事例を参考にすると、盾持人埴輪は他の人物埴輪群とは切り離されて配置され、周堀の外側や、屈曲部、正面などに立てられる場合の多いことが知られる。この点で、瓦塚古墳の盾持人埴輪が中堤の隅角部に置かれたとみられるのは扱い方が共通している。東大阪市西ノ辻遺跡の場合、古墳ではなく、古墳群の入口ともみられる谷に盾持人埴輪が置かれていたという。盾持人埴輪が一般の武人埴輪とは異なって、辟邪の性格を強く保有していたことを端的に示すものだろう。



第8図 盾持人埴輪の配置事例 1 女塚1号墳 2 おくま山古墳 3 原前1号墳

## 盾持人埴輪の分布と編年

盾持人埴輪は盾形埴輪に人物の頭部を付けたもので、手足の表現がないことを特徴としている。分布的には関東地方に集中する（第9図の7・9～11が該当）が、九州でも熊本県野津（8）、福岡県拝塚古墳（2）、同県塚堂古墳（3）、同県仙道古墳（12）など、かなりの分布が知られる。近畿地方では大阪府墓山古墳、西ノ辻遺跡、奈良県小墓古墳などから盾持人埴輪が出土しており、今後、資料が増加するものと思われる。また、人物埴輪の分布が希薄と思われていた北陸地方でも、石川県狐塚古墳例（6）が古く出土している。北限は今のところ福島県の原山1号墳例（4）である。

編年的な検討では、盾持人埴輪は盾形埴輪に人頭を付けた最古の人物埴輪であり、大阪府はさみ山遺跡や墓山古墳から盾面の上に細い円筒の突出する盾形埴輪（1）が出土しており、別体式の胃か人頭を挿入したものではないかと推定される。墓山古墳からは人頭大を超える大型の顔面の破片も出土しており、盾持人の頭部となる可能性が高い。墓山古墳からは黒班の付く円筒埴輪（川西Ⅲ期）が出土しているので、5世紀前半代まで遡るとみられる。このように初期の盾持人埴輪は頭部が別体製作であった可能性が高く、極めて巨大な作品のあったことを特徴としてあげうる。

この別体式の頭部をもつ大型品に奈良県羽子田遺跡例（5）や群馬県塚廻り1号墳例（9）があり、後者からは人物埴輪第4期（6世紀中葉）まで存続したことが知られる。おそらく、大型品のため埴輪窯の天井の高さの制限上、別体式とせざるをえなかったのだろう。

一方、人物埴輪第1a期（巫女埴輪の出現以前）の盾持人埴輪は福岡県拝塚古墳（2）からも出土しているが、頭部は本体と一緒に製作されている。盾は円筒の正面に線刻で表現されているだけで、ヒレ状の粘土板を加えていない。このため、まるで、コケシのような造形となっている。耳が通常の人物埴輪と異なって、団扇状に外側に向かって張り出しているのは、正面性の著しい埴輪であることに起因している。

人物埴輪第2期（5世紀後葉）には塚堂古墳（3）、原山1号墳（4）、狐塚古墳（6）、埼玉稻荷山古墳（7）、野津（8）の出土例をあげうる。盾面に着目すると塚堂古墳例と原山1号墳例は綾杉文と鋸歯文が線刻されているのに対し、狐塚古墳例と稻荷山古墳例は無文であり、新しい要素かと思われる。耳の表現法は一般の人物埴輪と共通する環形のものが塚堂古墳と原山古墳例に認められるのに対して、横に張り出す扁平なものが稻荷山古墳、狐塚古墳に認められる。両者とも次の時期に受け継がれるが、正面性を強調したものが主流的である。被り物については多様である。塚堂古墳例は大きな脇立の付いた被り物を付け、野津例は革胄かと思われる頭巾状のものを付けている。稻荷山古墳例は正面で二又となる特徴的な被り物を付けているが冠と断定しないほうがよいだろう。原山古墳例は粘土板を頭頂部に置き、両脇を下に丸め込んで特殊な結髪を示している。

第3期（5世紀末～6世紀前葉）の資料で、近畿地方の出土品に奈良県小墓古墳出土例、大阪府西ノ辻遺跡出土例がある。前者は人頭大より大きな頭部が付き、顔面には入墨を表す線刻がある。頭頂部は斜めに切り取られていて、塞がれていない。後者も頭頂部の処理や、盾面が無文である点などに共通性がありシンプルな製作である。



第9図 盾持人埴輪集成 1はさみ山遺跡 2拝塚古墳 3塚堂古墳 4原山1号墳 5羽子田

6狐塚古墳 7稻荷山古墳 8野津 9塚廻り1号墳 10舟塚古墳 11竜角寺101号墳 12仙道古墳

一方、関東地方では、群馬県保渡田VII遺跡から小型の盾持人が8体ほど出土しているが、頭頂部に角状の突起が2本ある。このほか、埼玉県おくま山古墳と女塚1号墳からも角状突起を付けた盾持人が出土している。これについては、かつて稚子鬚と見られたことがあり、中国の俑などに認められる双髪と関係する可能性も考えられた。しかし、埼玉県上中条出土の男子頭部（関西大学蔵）のように、明らかに帽子とみられる装飾の表現されたものがあることからすれば、やはり、丸帽を、笄を用いて頭頂部で留めた笄帽とみてよいだろう。この時期以降、関東地方では笄帽を被る盾持人の例が増加し、あたかも笄帽が盾持人のトレードマークだったかの感をいだかせる。

ところで、おくま山古墳の4体の盾持人は、いずれも顎鬚をたくわえ、額が狭く、猿面にも似て、独特な雰囲気をもっている。また、この内1体については口が兎唇に製作されている。

第4期（6世紀中葉）の盾持人埴輪には群馬県塚廻り1号墳例（9）、茨城県舟塚古墳例（10）、千葉県竜角寺101号墳例（11）、福岡県仙道古墳例（12）をあげることができる。盾面の文様は簡単な鋸歯文が主流となっており、退化的特徴とみられよう。被り物については多様性が認められる。面相については、耳が突出する点をのぞけば、通常の人物埴輪と異なるものが多い。しかし、塚廻り1号墳例は前述したように、大型の別体製作技法によるものであり、顔面に入墨を施す不気味な面相や頭頂部の尖る被り物など異色の存在である。埴輪の終末期となる第5期（6世紀後葉）には盾持人埴輪は極端に減少するようであり、良好な資料がない。

以上、概観してきた盾持人の変遷からは、①盾持人は他の人物埴輪より大振りに製作される傾向が強いこと。②正面性が著しく、耳が横に張り出すものが主流であること。③入れ墨を施すものがあること。④容貌魁偉なものがあること。⑤盾面の装飾は時間的経過とともに簡略化の流れが追えること。などを指摘することができよう。このことは盾持人埴輪の配置の特徴ともあわせて、塞の役割、辟邪の性格を色濃く反映したものと考えられる。瓦塚古墳の盾持人埴輪は①については意識されて製作されているものの、耳が簡略化され円孔となっている点、盾が無文である点に新しい要素がうかがわれる。そして何よりも容貌が隠やかである点では、盾持人に与えられていた呪術性の減退が看取されるように思われる。

（若松 良一）

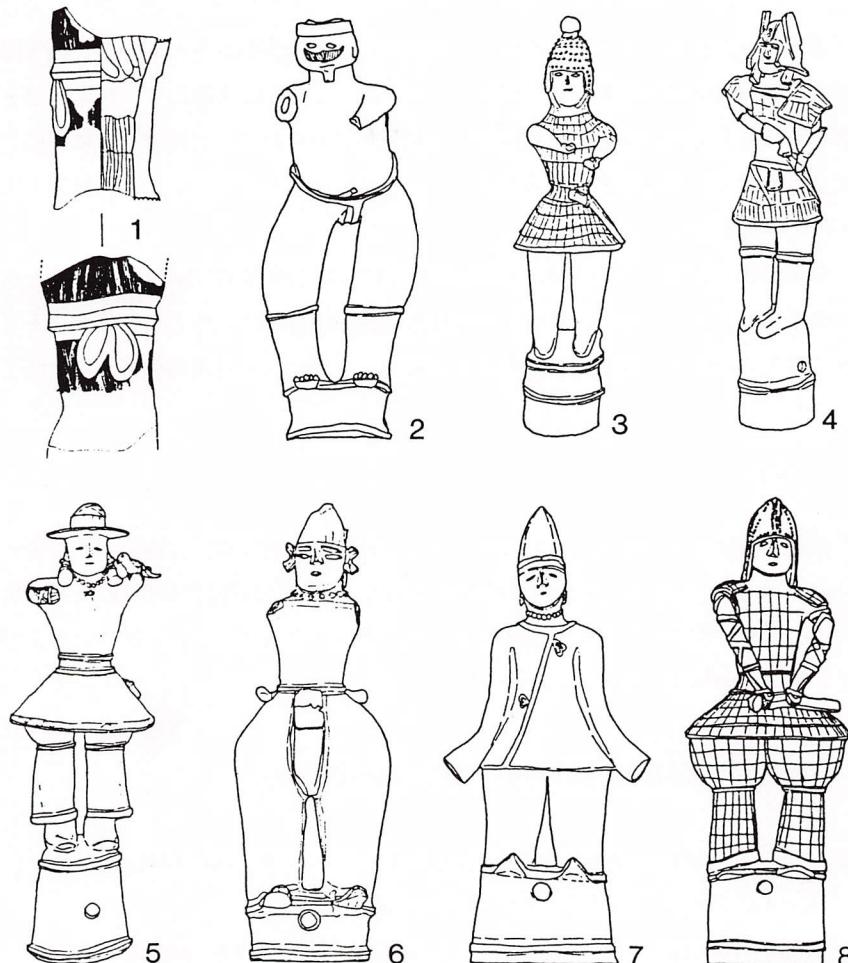
#### 4 全身像と台部の検討

今回資料報告した全身像は3個体分であり、内2個体は胴部が遺存し、草摺が表現されていることから武人像とみられた。台部に着目してみると、いずれも直径23cm前後の低い円筒で、天井部がドーム状をなしている。このため、足の部分は地なりに下がり不自然な印象を与える。資料5の台部の足に注目すると、線刻で指の表現がなされている。これは資料6の武人体部と同一個体である可能性が高いので、裸足の武人となるものかも知れない。武人は必ず靴をはき、裸足なら力士像となるなどという思い込みがきわめて危険なことを教えられた。

人物の腰の部分に着目してみると、資料6では3段、資料7では4段下りの草摺が粘土帯を実際に重ね合わせて写実的に表現されている。脚部はこの草摺の内側に半ばかくれているので、露出しているのは、およそ膝から下ということになる。資料6の場合、膝の付近に脚結の紐が表現され、正面

には、その結び緒が粘土紐によって示されている。これらの立像を観察しての印象は、小型で脚部が細いということである。一般に、全身像が大型化する段階では、脚結より上部を球形にふくらませ、草摺や衣服の裾を異常に幅広く誇張表現することが多いので、特に瓦塚古墳の全身像との差異は大きく感じられる。

第10図に各種の全身像を例示したので、全身像の表現法と台部の形態について、編年的に概観しておくことにしよう。人物埴輪の出現期（第1期）には軽装の武人が半身像として造形されるが、甲冑を着用する武人像は登場しておらず、基本的には甲冑形埴輪と呼ばれる器財形埴輪が製作された。全身像の登場時期は第2期（5世紀後葉）であり、関東地方では、埼玉稻荷山古墳から脚結の付く脚部（第10図1）が出土している。これには眉庇付冑を付けた大型の頭部と横矧板鉾留式短甲を付けた胴部を伴う可能性があり、等身大に迫るものとなるかも知れない。近畿地方では奈良県四条古墳から、円筒形の台部に靴と脛当てを着用した脚部の付く資料が出土しているが、革甲を付け、冑は被っていない可能性がある。



第10図 全身像と台部 1 稲荷山古墳 2 井辺八幡山古墳 3 舟塚古墳 4 上芝古墳

5 オクマン山古墳 6 酒巻14号墳 7 山倉1号墳 8 生出塚埴輪窯跡

第3期（5世紀末～6世紀前葉）になると全身像として造形される人物埴輪の割合が急激に増加する。近畿地方では、大阪府今城塚古墳出土の武人像が挂甲を着用した全身像として代表的な存在である。また、和歌山県井辺八幡山古墳では革甲や挂甲を着用した武人像のほか、力士像（2）が全身像として製作されているが、台部は円筒形で総じて低いものが伴う。

第4期（6世紀中葉）には、関東地方では挂甲と衝角付冑を着用した全身像が盛んに製作された。群馬県上芝古墳出土品（4）は該期の代表例であり、右手を大刀の柄にかけ、今にも抜刀しようとする様が造形されている。脚部に注目すると、細い円筒状に制作され、膝から上の部分も特に太くは表現されていない。台部は円筒形で天井がドーム状になっているため、靴先が地なりに下がっている。同様の特徴をもつ武人像に栃木県中山古墳出土品、福島県神谷作101号墳出土品などがある。茨城県舟塚古墳出土品（3）も基本的には共通した表現法をとっている。

第5期（6世紀後葉）になると近畿地方では、ほとんど人物埴輪が製作されなくなるが、関東地方では、人物埴輪の供給対象古墳が増加し、小型の円墳などにも全身像の立てられる場合が出てくる。武人像については挂甲と衝角付冑を着用し、抜刀の姿勢を示す大型の立像が盛んに製作された。特に群馬県にはすぐれた作品が多く、一定の工人集団からの供給が推定されている。埼玉県では生出塚埴輪窯跡から同様の表現の資料（6）が出土している。これらは共通して、草摺の裾を大きく開き、褲の脚結から上の部分を膨らませる誇張的な表現が認められる。台部はこれに対応して横長の楕円筒の大型品となり、靴先は台部から突出して、水平に示されている。この点は武人以外の全身像（5～7）にも共通している。

以上のような全身像の変遷からみると、瓦塚古墳例は第4期の典型的な資料ということができそうである。このことは、瓦塚古墳に伝統的な中空技法の腕が残存していることと整合するものであろう。ちなみに埼玉古墳群では愛宕山古墳からも同様の全身像台部（行田市教育委員会蔵）が出土している。

（若松 良一）

## 5 小 結

「形象埴輪の配置と復原される儀礼」と銘打ちながら、今回は、資料報告に終始してしまった。しかし、次回には『第8集』で報告した動物埴輪群像を加えて全体像の検討が可能となるはずである。また、復原途上の貴重な個体もいくつか残されている。原点に立ち帰って、各個体の十分なる観察を基礎として、全体像の構築に努めたいと思う。

（若松 良一・日高 慎）

\* 日高 慎 筑波大学大学院歴史人類学系博士課程（本館臨時職員）

### 参考文献

1. 杉崎 茂樹・若松 良一『埼玉古墳群発掘調査報告書第4集瓦塚古墳』埼玉県教育委員会 1986
2. 若松 良一『はにわ人の世界』埼玉県立さきたま資料館 1988
3. 若松 良一「埴輪の種類と編年－人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』第9巻 雄山閣 1992
4. 橋本 博文「関東地方の埴輪」『季刊考古学』第20号 雄山閣 1987
5. 辰巳 和弘『高殿の考古学』白水社 1990